

## 第二言語習得における非対格動詞と受動化

伊 東 美 津

### 1. はじめに

受動態といえば、所謂たすき掛けと呼ばれる操作によって他動詞文から作られることを学び、その後、文脈のない一つの英文を与えられ、能動態から受動態、あるいは、その逆の受動態から能動態への機械的書き換えを繰り返した英語学習者は多いに違いない。この書き換え操作そのものは学習者にとって難しいものではなく、それによる受動態の形自体の定着率は高いと言える。しかしながら、ただ単に、それをマスターしても受動態への理解を深めることはできない。例えば、(1a)(1b)(1c)(1d)では他動詞であるのにも拘らず、その受動態は正しいとは言えない。<sup>1</sup>

- (1) a. I have a nice car.
- b. John marries Tom.
- c. Private Smith deserted the army.
- d. A speeding car approached Mary.

(2a)(2b)は、自動詞であっても、正しい受動態と見なされる。

- (2) a. This bed was slept in by nobody.
- b. This house was lived in by Napoleon.

このように機械的操作だけでは説明できない受動態は多い。それゆえ、次

の段階として、どのような動詞に適用され、どのような適格条件の下で受動態が成立するのかを考えることが大切となってくる。上記の例文に関しては、Bolinger (1975)、池上 (1995)、吉川 (1995)、久野・高見 (2005)、高見 (2011) において、主語の特徴、目的語の指示対象、状態の変化、情報構造などの様々な見地から受動態が成立するための適格条件が論じられ、穏当な説明が与えられている。これらの条件を基に、受動態とは何のためにあるのかという洞察を深めれば、これらの条件から生じる習得の困難さは軽減されるであろう。しかしながら、受動態の習得には、さらに、より深刻で厄介な問題がある。それは、意外なようではあるが、学習者が自動詞と他動詞を文脈に応じて使い分けることができないことから生じるものである。例えば、自動詞を使うべき文脈で、誤って他動詞と判断し、受動態にしてしまうなどである。このような誤用の存在は早くから知られており、第二言語習得の研究では、初級の英語学習者というよりむしろ中級や上級の英語学習者に見られることが、Yip (1995)、千葉 (1999)、Ju (2000)、影山 (2000)、Oshita (2001)、Hirakawa (1997, 2003) などで指摘されている。

英語学習者は、なぜ、自動詞構文を使うべき文脈で受動態を文法的と見なすのか。この問題に対して、Zobl (1989) は、統語論で提唱された Perlmutter (1978) の非対格仮説を第二言語習得研究に応用し、問題となる誤用は非対格動詞の統語構造に起因することを論じている。<sup>2</sup> Zobl (1989) 以降、第二言語習得研究の分野では、非対格動詞の誤用分析が、統語論的、語用論的、認知論的観点から盛んに行われてきた。<sup>3</sup> 本稿では、これまで第二言語習得研究で提案された誤用を生み出すメカニズムの定式化や普遍文法との関係の妥当性を検討するのではなく、非対格動詞の習得を困難にしている要因は何なのかについて、学習者のアンケートを基に検討したい。第2章では、非対格仮説と第二言語習得研究での応用を概観し、第3章では、英語学習者のアンケートと語彙意味論で定式化された語彙概念構造に基づいて、非対格動詞の受動化の問題を意味的、認知的観点から論じ、統語論的分析だけでは問題の本質に迫ることができないことを指摘する。

## 2. 非対格動詞

### 2. 1. 非対格仮説

自動詞を誤って他動詞と見なし、受動態にする誤用の存在は、早くから指摘されてきた。松井 (1979: 155-156) は、(3a)などを挙げている。また、ミルワード (1980: 77-79) は、(3b)に関して、occurやhappenといった動詞はれっきとした自動詞で、学生がこれらを受動態に用いていることが多いことにはまったくびっくりさせられる、と述べている。

- (3) a. \*The atomic bomb was fallen.  
b. \*The event was occurred last year.

ミルワード (1980) は、こうした動詞に受動態が使用される理由として、ただ意味が受動的にすぎない、と核心をついた指摘をしてはいるが、なぜ、意味がそうなるのかについての説明はない。学校文法では、表層構造に基づく自動詞と他動詞の違いについては教えられるが、それ以上の分類について言及されることがないため、(3)のような非文の生成を許す動詞の特徴を捉えることができないのである。

この問題への洞察を深める嚆矢となったのは、統語論の枠組みである関係文法で提唱された Perlmutter (1978) の非対格仮説である。この仮説では、表層構造では、同じように見える自動詞であっても、(4)が示すように異なる深層構造を持つ2種類の自動詞の存在が論じられている。(4a)の場合、深層構造の目的語の位置にあるNPは、名詞句の移動により、表層構造では主語の位置にくる。深層構造の目的語が表層構造で主語の位置にくる(4a)のような自動詞は非対格動詞 (unaccusative) と呼ばれている。一方、主語NPが深層構造と表層構造で同じ位置にくる(4b)の自動詞は非能格動詞 (unergative) と呼ばれている。このように、非対格仮説の下では、自動詞は、さらに、非対格動詞と非能格動詞に下位区分されている。

- (4) a. 深層構造  $[_{NP} e]$  V NP  $\rightarrow$  表層構造 NP<sub>i</sub> V  $[_{NP} t_i]$

b. 深層構造・表層構造 NP V

Perlmutter (1978) による非対格仮説は、統語論の枠組みで論じられているが、意味に基づく非能格動詞と非対格動詞の分類も行われている。<sup>4</sup> その分類から、非能格動詞の深層構造と表層構造での主語の意味役割は、動作主 (Agent) や経験者 (Experiencer) となる。非対格動詞の深層構造での目的語の意味役割は、対象 (Theme) または、被動者 (Patient) となり、名詞句移動の適用により、目的語は、表層構造では、主語となる。その結果、その意味役割は、当然、対象 (Theme)、または、被動者 (Patient) となる。

- (5) a. The dog barked. (unergative)  
           ⟨Agent⟩
- b. The accident happened. (unaccusative)  
           ⟨Theme⟩
- c. The vase broke. (unaccusative)  
           ⟨Theme⟩

(5a)は、非能格動詞で、動作主 (Agent) の意味役割を持つ主語は、深層構造でも表層構造でも同じ位置に現れる。非対格動詞である(5b)と(5c)では、深層構造に主語は無く、対象 (Theme) の意味役割を持つ目的語があり、それが名詞句移動により表層構造の主語の位置に現れる。(5b)は、自動詞用法のみの非対格動詞であるが、(5c)は、他動詞用法も併せ持つ非対格動詞である。<sup>5</sup> 非対格仮説は、統語論で提唱された仮説であるが、そこでの議論にとどまらず、Zobl (1989) よって、第二言語習得研究分野にも応用され、その分析は、その後の非対格動詞誤用研究の導火線となった。

Zobl (1989) は、非対格仮説を受動態の過剰生成の分析に応用することで、学校文法では捉えることのできない(3)タイプの非文を生成する自動詞の特徴を明らかにしている。Zobl (1989: 204) は、日本人を含む英語学習者の作文に見られる(3)と同じタイプの誤用(6)を報告している。

- (6) a. \*The most memorable experience of my life was happened 15 years ago.  
b. \*Most of people are fallen in love and marry with somebody.  
c. \*My mother was died when I was just a baby.

Zobl (1989) は、(6)に関して、深層構造で目的語の位置にあったNPが表層構造で主語の位置に移動したもので、このようなNP移動は、受動態の操作と類似していることから、(6)に見られる誤用は受動態規則の過剰一般化の結果であると論じている。早くから着目されてきた(3)のような誤用やミルワード(1980)の意味が受動的であるという指摘は、非対格動詞の目的語NPと受動態を引き起こす他動詞の目的語NPとの間に見られる統語構造及び意味役割の類似のため、誤って受動態規則が適用された結果であるという統語的説明を与えることができるだろう。

このように、自動詞を非対格動詞と非能格動詞に分ける非対格仮説は、学校文法では説明できない自動詞の受動化の誤用とそれに関与する動詞の特徴を捉えることができたという点で大きな成果をもたらしたと言えるだろう。

Zobl (1989) では、非対格仮説に基づいて、非対格動詞の受動化の現象は、受動態規則の過剰一般化であるという統語的観点から分析されている。また、様々な母語を持つ英語学習者に同様の誤用例が存在することも指摘され、そのことから普遍文法の関与の有無も検討されている。Zobl (1989) 以降、第二言語習得の研究分野では、自動詞を非能格動詞と非対格動詞に分ける非対格仮説を基に、(3)タイプの誤用分析が盛んに行われるようになった。次節では、Hirakawa (1997)・Ju (2000) の実験とその結果、及び非対格動詞の範疇に属する語彙であっても誤用の割合に差があることや認知的分析について概観したい。

## 2. 2. Hirakawa (1997)

Hirakawa (1997) は、日本人学生18名と英語母語話者10名を対象に(7)に挙げた四つのタイプの動詞に関する2種類のタスクを行っている。タイプA

は他動詞用法を併せ持つ非対格動詞で、タイプBはその用法を持たない非対格動詞である。Hirakawa (1997) の実験で与えられたのは、(8)のような擬似受動態構文と結果構文の文法的確性の程度を問うタスク (Grammaticality Judgment Task)、及び(9)のような与えられた文脈に基づいて動詞を適切な形にするタスク (Elicited Production Task)である。<sup>6</sup>

- (7) Type A: Unaccusative Verbs(i): break, burn, freeze, grow, melt  
Type B: Unaccusative Verbs(ii): appear, arrive, come, die, fall  
Type C: Unergative Verbs: dance, laugh, play, sing, swim  
Type D: Transitive Verbs: build, cut, hit, paint, wash

- (8) a. But that studio was never sung in until yesterday.  
b. \*The stairs are often fallen down by children.  
c. \*She danced tired.  
d. Her hair grew long.
- (9) John was looking out of the window. Because of a typhoon, it was raining heavily, and the wind was blowing the trees. All of a sudden, one of the trees (break).

Hirakawa (1997: 21-26) は、(8)のような非能格動詞と両立する擬似受動態構文と非対格動詞と両立する結果構文の文法的確性の程度を問うタスクの平均スコアから、学習者はこれらの構文に関する非対格動詞と非能格動詞の統語的属性の違いを区別できると結論付けている。さらに、この区別を可能にする何らかの生得的原理が働いているのではないかということを示唆している (Hirakawa (1997: 25))。

(9)のようなタスクの結果から、学習者は非能格動詞には正確であるが、非対格動詞にはあまり正確ではないこと、また、非対格動詞の中でも、他動詞用法を併せ持つタイプAが、他動詞用法のないタイプBに比べて正確でないこと

が報告されている。また、タイプAに属する非対格動詞すべてが同じ割合で受動化を起しているのではなく、動詞により異なることも報告されている。breakは、18人中11名にエラーが見られ、正しいはずの自動詞としての用法を誤りと見なしている。freezeは6名、burnは5名、growは1名が、自動詞であるべきところを受動態の方を正しいと判断している。タイプBについては、fallは3名、dieは1名が、受動態を正しいと判断している。非能格動詞であるタイプCに関してはlaughのみに受動化の誤りが見られた。タイプDについては、文法的である受動態をほぼ正しいと判断している。<sup>7</sup>

Hirakawa (1997) の結果をまとめると、英語学習者は、非対格動詞と非能格動詞が用いられる構文を正しく区別できること、非対格動詞の中でも、他動詞用法を併せ持つ非対格動詞の習得が困難であるということになる。

Hirakawa (1997) は、非対格動詞に見られる受動態の過剰生成に関して、その範疇に属する動詞の受動化の誤用には程度の差があることを示しているが、Hirakawa (1997) の分析は、Zobl (1989)、Oshita (2001) と同じように、NP移動と受動態規則の類似から生じる過剰一般化であるという統語的立場であることに変わりない。<sup>8</sup> 一方、Ju (2000) は、Hirakawa (1997) など従来の研究とは異なる立場を取っている。Ju (2000) は、これまでのような統語的アプローチでは、すべての非対格動詞を同じように処理するため、同じ非対格動詞であっても、受動化の程度に差があることを説明できないとし、認知的観点からの分析という新たなアプローチを提案している。

### 2. 3. Ju (2000)

Ju (2000) は、(10)のような外的なことに起因する事象 (externally caused events) と(11)のような内的なことに起因する事象 (internally caused events) とでは、非対格動詞の受動化に違いがあるのか否かについて実験を行っている。実験方法は、35名の中国語を母語とする英語学習者が(10)や(11)のような文脈では、非対格動詞と受動態のどちらを選択するかを二者択一方式である。<sup>9</sup> また、この実験では、外的要因が事象を引き起こす原因となるような(10)の場合、外的要因であるheavy trucksが、橋が壊れたという事態を引き起こす

概念化できうる動作主 (conceptualizable agents) と想定され易いので受動態が選択されるのではないかと、一方、内的な要因が原因となるような(11)の場合、橋が壊れたのは、橋が古いという内的要因のため、概念化できうる動作主 (conceptualizable agents) は想定されにくいのではないかという仮説が立てられている。<sup>10</sup>

- (10) Heavy trucks put more and more pressure on the bridge. (externally caused)

It (broke/was broken) gradually.

- (11) The wooden bridge was very old. (internally caused)

It (broke/was broken) gradually.

実験結果として、他動詞と自動詞の両方の用法を併せ持つ非対格動詞では close や break に受動化の誤用が多く見られ、grow や decrease は少ないこと、また、自動詞用法だけの非対格動詞では、vanish に誤用が多く、appear に少ないことが報告されている。Ju (2000) では、Hirakawa (1997) とは異なり、学習者は、自動詞と他動詞の両方の用法を併せ持つ非対格動詞だけでなく自動使用法のみを持つ非対格動詞にも困難を抱えていることが論じられている。

談話構造から認知的に想定される動作主の有無に対しては、外的なことに起因する事象 (externally caused events) の方が、内的なことに起因する事象 (internally caused events) より、受動化の誤りが多いことが報告され、Ju (2000) の仮説は実証されたことになる。つまり、学習者は、外的なことに起因すると想定される文脈の方が、談話構造から動作主や直接の原因を推定し易いため、非対格構文より受動態を選ぶ傾向があるということが示されたのである。非対格動詞は、本来、統語構造上の動作主を欠いているのにも拘らず、学習者は談話構造から、動作主となる直接の原因を認知的に想定して、非対格動詞の受動態を選択したのである。Ju (2000: 106) は、主語の意味役割が、対象 (Patient) である場合、語用論的文脈から、動作主を想定できうるため、学習



者は、語用論的に他動詞と見なし、過剰受動化を引き起こすとしている。

Ju (2000: 103) は、非対格動詞という範疇に属する動詞の受動化の差は、動詞が様々なことを引き起す原因の直接性 (directness) の程度が異なるからではないかと述べている。NP 移動という統語的アプローチではこのような相違を説明できないため、Ju (2000) は、従来の研究では検討されてこなかった認知的要因、つまり、語用論的に想定できる動作主や直接の原因といったような要因が、非対格動詞に観察される受動態の過剰生成を分析する上で考慮されるべきであると結論付けている。

これまで第二言語習得の研究でなされてきた実験結果には差があるものの、学習者は、非対格動詞の習得に問題を抱えているという点では一致している。これが、統語的なものに由来するのか、認知的なものに由来するのか、母語の負の転移はあるのかなどを検討する必要がある。そのためには、今後、さらに、語彙ごとの詳細な分析方法や新たな実験を開発しなければならないであろう。以下の議論では、そのような新たな包括的分析を提示するのではなく、学習者に非対格動詞と受動態のどちらが文法的であるかを決める際の判断理由を直接記述してもらい、その記述内容を基に、非対格動詞の習得過程で重要な役割を果たしている要因について検討したい。その結果を基に、語彙意味論で提唱されている語彙概念構造の定式化の事象関係から学習者が非対格動詞習得の過程で最も困難と思われるのは何かについて考察したい。

### 3. 学習者の意識と非対格動詞

#### 3.1 学習者の判断理由

Hirakawa (1997) のタスクは、学習者に対して、与えられた文脈から動詞を適切な形に直させるものと文法的確性の程度を選ばせるものであった。また、Ju (2000) では、非対格動詞と受動態のどちらが文法的かを学習者に選択させる二者択一のタスクであった。本稿では、初級から中級レベルに位置づけられるであろう日本語を母語とする大学生を対象に、先行研究での誤用例や Hirakawa (1997) 及び Ju (2000) で用いられたタスクの一部を利用し、正しい形を選択する際の判断理由を記述してもらう調査を行った。この調査の目的

は、その記述内容から、非対格動詞の受動化にはどのような要因が関与しているかを知るためである。1 回目は32名に(11a)～(11e)、(12a)～(12d)のタスクを行い、また、3 名が欠席のため2 回目では29名に(12e)～(12i)のタスクを行った。<sup>11</sup>

- (11) a. The accident (happened/was happened).  
b. Most people (fell/are fallen) in love and marry with somebody.  
c. The event (occurred/was occurred) last year.  
d. My mother (die/was died) when I was just a baby.  
e. The fog cleared. The house (appeared/was appeared) slowly.
- (12) a. John was looking out of the window. Because of a typhoon, it was raining heavily, and the wind was blowing the trees. All of a sudden, one of the trees (broke/was broken).  
b. Heavy trucks put more and more pressure on the bridge.  
It (broke/was broken) gradually  
c. The wooden bridge was very old. It (broke/was broken) gradually.  
d. I walked through the automatic door.  
The door (closed/was closed) immediately.  
e. He made a hole at the bottom of the water bottle.  
The water level (decreased/was decreased) gradually.  
f. He injected a growth hormone into the tree.  
The tree (grew/was grown) tall quickly.  
g. It didn't rain for a long time.  
The water level (decreased/was decreased) gradually.  
h. I pushed the door. The door (closed/was closed) immediately.  
i. The weather was mild. The tree (grew/was grown) tall quickly.

全体的な傾向として、非対格動詞でなく受動態を文法的に正しいと見なして

いることに関しては先行研究とほぼ同じである。まず、他動詞用法のない非対格動詞(11)において、32名中、happen27名、occur24名、fall19名、appear16名、die14名が受動態を選択している。<sup>12</sup> また、Ju (2000) 同様、他動詞用法のない非対格動詞も受動化の程度に差があることがわかった。このことはJu (2000) が指摘しているように、すべての非対格動詞を同じやり方で処理できないことを示していることになる。

さらに、本調査の学習者に、(11)で受動態を適切だと判断した理由を自由に記述させたところ、NP移動という統語構造に基づく理由ではなく意味的、認知的要因に基づいて判断していると思われる内容であった。つまり、非対格動詞の意味と主語の特徴から、統語構造に反映されることのない談話構造を想定し、それに基づいて、動作主・使役主・原因を推定し、その結果、受動態を正しいと見なしているのである。happenやoccurでは、行為を受ける対象が主語になっているからというNP移動に基づくような統語的理由もあったが、事故やイベントは自ら起こるものではなく、何かが原因で引き起こされるものであるため、何らかの使役主の存在を想定する必要性を述べている回答が多い。いかなる文脈を与えられていないにも拘らず、統語構造に反映されない談話構造を想定し、そこから推定できる動作主・使役主の存在に基づいて受動態を文法的であると見なしているのである。唯一内的要因が原因となるような文脈を与えられたappearについては、家は自ら見えなくなるわけではなく、それを引き起こすものがあるとし、それに基づく談話構造を想定し、使役主の存在から受動態を選択している。また、主語が人か事柄かに着目し、人であれば、自ら意志を持って動作を行えるが、事柄の場合は、自ら行えないため、その変化を引き起こす使役主を想定し、その結果、受動態を正しいものとして見なしているのである。fallとdieに対しては、受動態を選んだ理由の記述はなく、非対格動詞を正しいとした理由には、主語が人であることやそれらの動詞が自動詞であることを挙げている。

このように、統語構造というよりむしろ、主語と非対格動詞の意味から想定される談話構造に基づいて推定される使役主の存在の有無が受動態を選択する上で重要な要因となっている。つまり、学習者が、統語構造とは異なる使役化さ

れた談話構造を想定していることが受動化という誤用の原因となっているのである。また、動詞による誤用の割合の差も、主語の性質と非対格動詞の意味が使役主の存在を想定させうるかに起因するもので、統語的要因に帰することはできない。

(13)から他動詞用法を併せ持つ非対格動詞に関して、Hirakawa (1997)・Ju (2000) と同様、このタイプの非対格動詞においても誤用に差があることがわかる。<sup>13</sup>

(13) 他動詞用法を併せ持つ非対格動詞の結果

	a. break	b. break	c. break	d. close	e. decrease
非対格動詞	7	5	11	10	8
受動態	23	23	19	19	20
	f. grow	g. decrease	h. close	i. grow	
非対格動詞	21	16	5	14	
受動態	7	12	22	13	

(13)の表から、growを除いて、おおよその傾向として、外的原因と内的原因では、Ju (2000) 同様、前者の誤用が多いことがわかる。他動詞用法を併せ持つ非対格動詞において、受動態を文法的であると見なした理由として、主語の位置にある語彙が、その行為を自ら行えるかどうか、つまり、無生物の場合は、自らその行為を行えず、それを可能にする動作主・使役主の存在の必要性を挙げている。(12a)では台風によって木が倒された、(12b, c)では、主語の位置にある橋は物であり、それは何かによって壊される性質を持っていると考え、受動態を文法的と判断している。(12c)で、正しい非対格動詞を選択した理由として、橋が古くなったからと回答し、橋が自らその状態に至ることを理解している学習者もいる。(12d)では、自動ドアにおいてさえ、自動ドアが閉まるという事象に対しても、それを引き起こす使役主の存在を想定している。ドアは無生物なので、ドアが閉まるという事象に関与する使役主・動作主を談話構造から想定する必要性を感じているのである。外的原因の(12e)の場合、無生物主語 (the water level) は、自らの意志でその動作を起こすこと

ができないので、それを引き起こす使役主が必要であると判断し、その結果、受動態を選択している。内的原因の(12g)でも、水は自ら減少するものではなく、それを引き起こしているものが存在するとして、長い間雨が降らなかったということを使役主・原因として想定している。外的原因の(12f)は最も正答率が高く、非対格動詞を選んだ理由として、木は自分で成長するという回答が多い。一方、受動態を選んだ理由として、木は物体であるので、物体は自ら事態を引き起こすことはできないということを挙げている。内的原因である(12i)で、growの受動態を選んだ理由として、木は物体であり、天気によって育てられると考えている。つまり、天気を使役主と見なしているのである。これは、木の成長には天気のような気象条件が必要であるという背景知識があるためかもしれない。

このタイプの非対格動詞に関しても、学習者は、文脈と主語や動詞の意味から、使役主が存在する談話構造を想定し、受動態を正しいと判断している。このタイプの非対格動詞も、(11)と同様に、使役化された談話構造の想定が受動化という誤用の原因になっていることがわかる。非対格動詞の語彙間に認められる受動化の差については、主語と非対格動詞の意味的、語用論的関与が認められ、統語的情報で説明できないのは明らかである。

本調査から、他動詞用法を併せ持つか否かに拘らず非対格動詞の受動化という誤用が生成される背景には、統語的要因というよりむしろ想定されうる談話構造が重要な役割を果たしていることがわかる。本調査では初級、中級、上級の学習者を対象とした広汎かつ詳細な調査を行っていないので、すべてのレベルの学習者に当てはまるかについての結論を出すことはできないが、学習者による記述内容はそのような要因が関与する習得段階の存在を否定するものではない。また、すでにJu (2000) で論及されているように、非対格動詞の受動化の分析には、意味的、語用論的考慮が必要であり、本稿での調査は、Ju (2000) の主張を補完するものであると言えよう。

本章では、学習者が主語と非対格動詞の意味から、統語構造に反映されない談話構造を想定し、使役主の存在を認知していることがわかった。これは、学習者が、習得過程で非対格動詞を使役化する段階があるということを示唆して

いるものであると言ってもよい。そうであれば、次に検討すべきことは、非対格動詞の習得過程で、使役化された文から正しい非対格構文が生成されるのを阻止しているのは何かということである。次節ではこの問題について、語彙意味論で提案された語彙概念構造を基に論じたい。

### 3. 2. 非対格動詞の反使役化の問題

吉川 (1995: 117) は、能格動詞の場合は、動作・変化の対象であると同時に、「みずから然する (= 動詞が表す動作・作用に対する何らかの責任を持つ)」という自立性を帯びている場合にのみ、対象を主語に据えた自動詞文が用いられ、「他に然せらるる」という他力性を帯びていれば受動文が選ばれると述べている。つまり、英語では、主語に動詞が表す活動や変化の過程に責任あるか否かが、自動詞文と受動文を選ぶ際の基準となると述べている。このことから、英語学習者が非対格動詞を習得する過程で「みずから然する」という非対格動詞の持つ自立性への理解の欠如が受動化という誤用を生み出していると言えるだろう。「みずから然する」とはどういうことなのかについて、語彙意味論で定式化された語彙概念構造を用いて整理してみたい。語彙概念構造を用いるのは、統語構造に写像される項構造 (argument structure) の意味役割 (semantic role) では、非対格動詞の複雑な意味構造に迫ることができず、学習者が非対格動詞の習得過程のどこに困難を抱えているのかを捉えることができないからである。

影山 (1996: 145) は、自動詞と他動詞の両方を併せ持つ break, close, open のような動詞は、基本的概念構造として、二つの事象からなる [x CONTROL [y BECOME [yBE AT-z]]] という使役構造を持ち、その自動詞の用法である非対格動詞の概念構造は反使役化によって求められるとして、次のように定式化している。

- (14) [x CONTROL [y BECOME [yBE AT-z]]]  
 → [x=y CONTROL [y BECOME [yBE AT-z]]]

影山（1996）は、他動詞を基本とみなす根拠の一つとして、自他両用の動詞は何らかの使役主を含意しており、英語は基本的に使役構造から反使役化によって自動詞を導くという一方通行の操作しかないと考えられているとしている。影山（1996: 144-145）によればCONTROLというのは、主語がその本来的な性質のために、状態変化に「責任」を持っているということであると説明している。また、(x) は使役主であり、(y) は変化対象である。反使役化は、使役主が変化対象と同定され、意味的に束縛される操作で、束縛を受けた使役主は、対象物と意味的に同一物であることが意味構造で保障されるから、統語構造には現れないとしている。つまり、使役主は概念構造には存在するが、統語上は現れないのである。使役主 (x) と対象物 (y) が同一であるときに非対格動詞となり、別であるときに他動詞の用法となる。

影山（1996）は、さらに、使役主と変化対象に関して、変化対象が使役主として働く資質ないし性質を内在的コントロールと呼び、これがなければ変化対象を使役主と同定できないとしている。例えば、同じbreakであっても、The storm broke the window. /The window broke. に対して He broke his promise. /\*His promise broke. のような違いがあるのは、内在的コントロールによってきれいに説明される（影山（1996: 160））。アスタリスクのある非文の主語の「約束」は自らの力では壊れる力を持たないと認識されるので、自動詞文は非文法的となる。「約束」は、内在的コントロールを備えていないため、自動詞が使われないのである。影山（1996: 163）は、非対格動詞は使役の概念構造を基本として、自らその状態になるような内在的コントロールの性質を備えた対象に対しては自動詞形でも使用できると考えられると述べている。<sup>14</sup>

影山（1996）は、自他交替のあるものと無いものでは、統語的振る舞いが異なるため、自他交替のある非対格動詞に対してのみ、使役化と反使役化の概念構造(14)を定式化している。本稿の調査では、自他交替の有無に拘らず、いずれの非対格動詞であっても、学習者は使役主が関与する談話構造を想定し、使役主が対象物の状態変化に責任あると考えていることがわかった。それゆえ、(14)の定式化は二つのタイプの非対格動詞に当てはまると見なし、議論を進めていくことにする。

前節で、主語や動詞の意味から、統語構造とは異なる談話構造を想定し、その結果、受動態を文法的と見なす習得段階があるのではないかということ指摘した。その習得段階では、非対格動詞文に対する理解不足のため、正しい出力を生み出すことができないのである。この習得段階を(14)の使役の概念構造と反使役化を用いて説明すると、学習は、[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]のような使役構造を想定することはできるが、反使役化までには至っていないということになる。それゆえ、非対格動詞の習得過程で生じる問題は、反使役化にあるということになる。反使役化とは使役主と変化対象を同定することであるため、学習者はそこに問題を抱えていることがわかる。使役主と変化対象を同定するには、対象物が自発的变化を引き起すという自立性の認識、つまり変化対象の内在的コントロールといった意味的、認知的理解が必要となる。形態論的、統語論的情報だけで、このような非対格動詞の本質に迫ることはできないということは明らかである。このように語彙意味論で提案された使役化の概念構造とその反使役化の定式化は、学習者が非対格動詞習得過程で困難に感じるものは何かを明示的に示しており、これは、非対格仮説やその後の第二言語習得研究での統語的アプローチでは捉えることができないものである。

この使役主と変化対象の同定は、受動化の誤用が示しているように、非対格動詞を習得する上で最大の難関であると思われる。特に、他動詞用法を併せ持つ非対格動詞の場合、文脈によっては受動態も文法的になるので、使役主と変化対象を同定できるか否かについての理解はより複雑で、形態論的、統語論的情報だけで説明するのはほとんど不可能である。例えば、break、close、openのような動詞は、使役主の捉え方によって、非対格動詞にも他動詞にもなる。この使役主の捉え方が、動詞によっては難しく、これが非対格動詞の受動化の程度の差となって現れる。例えば、武田(2017: 57)によれば、breakの中核的意味は〈〈力を加えて〉〈形あるものを〉壊す〉である。そのためか、使役主と対象物の同定、つまり、変化対象が自らの性質によって状態変化を被るという意味を理解しづらい。その結果、breakのような他動性の強いものは、使役主を対象物と別と見なし、使役主が対象物に変化を与えたという談話構造



を想定し、反使役化の適用に失敗する。動詞が他動性の強いものであればあるほど主語と動詞の意味に基づいて、談話の中での使役主を想定しやすいため、非対格動詞構文が持つ「みずから然する」という変化対象の内在的コントロールへの理解が難しくなるのかもしれない。一方、受動化の誤用が比較的少ない grow は、自動詞から他動詞へ使役化したものである（影山（1996: 195））。それゆえ他動性があまり感じられないため、使役主と変化対象の同定から生じる、「みずから然する」という自発性の認識が容易で、学習者にとって反使役化を適用し易い。このように同じ非対格動詞の範疇に属する語彙であっても、反使役化の適用は、その語彙の意味的、認知的要因の影響を受けている。これが、受動化の誤用の割合の差となって現れる。

これまでの議論から、非対格動詞の受動化やその習得過程には、意味的、認知的要因が関与していることは明らかであり、形態論的、統語論的観点からの分析では非対格動詞の本質に迫ることはできないと結論付けることができる。また、非対格動詞の習得を阻んでいるのは使役主と変化対象の同定の難しさであることを指摘したが、そこには、意味的、認知的要因が働いているため、形態論や統語論で説明できる現象に比べて、そこで観察される現象の詳細な分析はかなり複雑なものとなるだろう。使役主と変化対象の同定を困難にしているそのようなさまざまな要因の包括的分析については今後の検討課題としたい。最後に、英語教育の観点から言えば、単に自動詞と他動詞の区別だけでは不十分で、非対格動詞の性質を考慮した指導法や教材の開発が必要であることも併せて指摘しておきたい。

#### 4. おわりに

Zobl (1989) が受動態の過剰生成の問題を説明するために、非対格仮説を第二言語習得研究に応用して以来、NP 移動や他動詞化仮説などの統語的分析や動作主を想定する認知的分析などが行われてきた。本稿での調査から、学習者が、主語や非対格動詞の意味を基に、統語構造とは異なる談話構造を想定し、それに基づいて使役化を行った結果、非対格動詞の受動化という問題が生じていること示した。これは、非対格動詞の誤用分析では統語的要因というよりも

しろ認知的要因を考慮すべきであるとする Ju (2000) の主張を支持するものである。

さらに、本稿では、学習者が使役化した談話構造から正しい非対格構文を生成する過程で、どこに問題を抱えているかの検討を行うために、語彙意味論で提案されている語彙概念構造の知見を用いた。その枠組みで提案された使役の概念構造から反使役化への定式化は、反使役化を起すには使役主と変化対象の同定が必要であり、特に、変化対象に対する内在的コントロールへの理解は不可欠であることがわかった。このことから、非対格動詞の受動化という誤用の原因は、「みずから然する」ことへの理解の難しさや主語が持つ意味的、認知的理解が十分ではないことにあると言える。これは、形態的、統語的情報だけでは、処理できない側面であり、非対格動詞の習得には、意味的、語用論的、認知的考慮とそれに基づく指導法や教材の開発が肝要であると結論付けることができる。

#### 注

- 1 (1)(2)の例文は、Bolinger (1975)、池上 (1995)、久野・高見 (2005)、高見 (2011) からの引用。
- 2 Perlmutter (1978) は、自動詞用法のみの非対格動詞と他動詞用法を併せ持つ非対格動詞を区別せず非対格動詞として扱っているが、影山 (1996) は、前者と後者とでは、統語的特徴に違いがあることから、前者を非対格動詞とし、後者を能格動詞としている。吉川 (2000) では、自他交替のある動詞を能格動詞と呼び、自動詞用法のみの場合は議論されていない。本稿では、この問題を分析している他の第二言語習得研究と同じように自動詞用法のみの場合も自他交替がある場合も非対格動詞として扱う。
- 3 統語的分析がほとんどである中で、Ju (2000) は、語用論的、認知的観点からの分析を行っている。
- 4 意味的分類の具体例については、Perlmutter (1978: 162-163) を参照。影山 (1996: 21) は、非能格動詞は、意図的動作や行為・生理的現象が主語であるため、スル型であり、非対格動詞の主語は、状態や位置が変化するもので、自分の意志で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るナル型であると指摘している。
- 5 非対格仮説は、深層構造での意味役割は、同じ統語構造 に写像されるとする the Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (Baker 1988) という普遍的

原理によっても支持されていると考えられている。

- 6 Hirakawa (1997) には、実験で用いられたすべての英文の記載はないが、Hirakawa (2003: 266-268) にはすべて掲載されている。
- 7 他動詞のタイプDに関しては、build、cut、hit、washに誤りが見られ、正しいはずの受動態でなく、非文法的自動詞構文を正しいと見なしている。例えば、  
\*The bridge built between the two islands.のような誤用である。このような誤用に関して、Hirakawa (1996: 25) は母語からの転移かもしれないと述べている。
- 8 Yip (1995) は、他の統語的分析と異なり、他動詞化仮説 (Transitivization Hypothesis) を立てているが、非対格動詞を基底構造で他動詞と見なしているの  
で、同じ統語的分析となる。
- 9 中国語を母語とする学習者を選んだ理由は、母語の影響が現れにくいためである。
- 10 Ju (2000) は、非能格動詞、非対格動詞、他動詞に対して、54の英文を用いて  
調査を行っている。
- 11 Hirakawa (1997)、Ju (2000) では、happen、occurについての調査は行われ  
ていない。
- 12 このタイプの非対格動詞の受動化に関して、白畑 (2015) は、母語である日  
本語からの転移を指摘している。白畑 (2015: 78-79) は、「happen、appear、  
disappearといった、日本語に他動詞形が存在する動詞の解釈に困難を生じる傾向  
があり、それらを他動詞構造の中で使用してそれが正しいと判断する。また、英  
語の非対格動詞の場合、無生物が主語になりうることも強調すべきである。無生  
物を主語とする表現が発達していない日本語を母語とする私たちは、感覚的に主  
語になるものが自分の意志でその動詞の行為するものだと思っている。よって、  
意志のない無生物は能動的にそのような動詞の行為をすることはできないと考  
える。例えばearthquake、accidentといったものが主語に來ると、そのものの意  
志で働くことができないから」と述べている。この説明は、一見当を得たもので  
あるように思える。しかしながら、他の言語を母語に持つ英語学習者にも同じよ  
うな誤用が見られるので、母語の違いによる詳細な調査が必要であろう。また、  
白畑 (2015) の主張では、appearの誤用の原因と考えられる日本語の「現れる・現  
わす」の場合、他動詞「現わす」は、その目的語になる語彙に制限があり、「起き  
る・起こす」の他動詞に比べて生産的ではない。無生物主語が、日本人学習者に  
とって難しいのは、他動詞構文の場合である。非対格動詞の場合、日本語でも「事  
故が起きる・枝が折れる」のように無生物主語をとる。このように英語と同じよ  
うな表現を日本語でもするのにも拘らず、英語でそれを表そうとすると誤って受  
動態を生成する。それゆえ、非対格動詞の誤用は母語の転移だけでは説明できな  
いように思われる。
- 13 表の数字は回答数を表す。

14 小野 (2000 : 22) は、語彙概念構造とは独立した事象構造を仮定し、内的コントロールの概念を次のように図式化している。

- a. 事象構造 :  $e_1(x) \quad e_2(y)$   
 LSC:  $[_x\text{ACT}] \text{ CAUSE } [_y\text{BECOME} \langle \text{STATE} \rangle]$
- b. 事象構造 :  $e_1(x) \quad e_2(x, y)$   
 LSC:  $[_x\text{ACT}] \text{ CAUSE } [_y\text{BECOME} \langle \text{STATE} \rangle]$

The storm broke the window. / The window broke. と He broke his promise. / \*His promise broke. の違いは、前者が事象構造aを、後者が事象構造bを持つことで説明されている。

### 参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Bolinger, D. (1975) "On the Passive in English," *LACUS* 1, 57-80.
- 千葉修司 (1999) 「英語の非対格動詞の第一・第二言語習得」『研究報告 (3) 先端的语言理論の構築とその多角的な実証』 357-396. COE、神田外国語大学.
- Hirakawa, M. (1997) "On the Unaccusative/Unergative Distinction in SLA," *JACET Bulletin* 28, 17-27.
- Hirakawa, M. (2003) *Unaccusativity in Second Language Japanese and English*. Tokyo: HitsujiShobo.
- 池上嘉彦 (1995) 『〈英文法〉を考える』 東京：筑摩書房.
- Ju, M. K. (2000) "Overpassivization Errors by Second Language Learners," *SSLA* 22, 85-11.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2000) 「非対格と第二言語習得」『英米文学』 44: 47-59.
- 久野璋・高見健一 (2005) 『謎解きの英文法一文の意味—』 東京：くろしお出版.
- 松井絵美 (1979) 『英作文における日本人的誤り』 東京：大修館書店.
- ミルワード, P. (1980) 『英語の語法診断—日本人の英語の誤り』 東京：南雲堂.
- 小野尚之 (2000) 「動詞クラスモデルと自他交替」丸太忠雄・須賀一好編『日英語の自他交替』 1-31. 東京：ひつじ書房.
- Oshita, H. (2001) "The Unaccusative Trap in Second Language Acquisition," *SSLA* 23, 279-304.
- Perlmutter, D. M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4, 157-18.
- 白畑知彦 (2015) 『英語指導における効果的な誤り訂正—第二言語習得研究の見地か

ら』東京：大修館書店.

高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』東京：研究社.

高見健一 (2011) 『受身と使役』東京：開拓社.

武田修一 (2016) 『教育英語意味論への誘い』東京：開拓社.

吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』東京：くろしお出版.

Yip, V. (1995) *Interlanguage and Learnability: From Chinese to English*.  
Amsterdam: Benjamins.

Zobl, H. (1989) "Canonical Typological Structures and Ergativity in English L2 Acquisition," *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*, ed. By S. M. Gass and J. Schachter, 203-221. Cambridge: Cambridge University Press.